

# 2015年度事業計画書

公益財団法人 東洋文庫

# 2015年度公益財団法人東洋文庫事業計画書

公益財団法人 東洋文庫  
理事長 榎原 稔

2015年度公益財団法人東洋文庫事業計画の概要は下記の通りです。

## 事業目的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

## 事業項目

I	調査研究.....	2
II	資料収集・整理.....	16
III	研究資料出版.....	17
IV	普及活動.....	18
V	学術情報提供.....	19
VI	地域研究プログラム.....	21

## I. 調査研究

東洋文庫は1924年に岩崎久彌氏により、世界唯一のコレクションであるモリソン（G. E. Morrison）コレクションならびに日本古典貴重資料を含む岩崎コレクションを中核とするアジアの貴重図書・資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後90年間にわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を散逸させることなく保存・管理し、同時に広く市民並びに世界の研究者に公開し、アジア諸地域の歴史文化に関する基礎資料を組織的かつ継続的に収集し、公開することを目的とした事業を進めてきた。研究事業の主たる目的は、これらの資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料にもとづく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような事業を250名に及ぶ研究員を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀な例であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に注目される理由である。

東洋文庫は、この目的をさらに効果的に実現するために、2012年度からは、これらの基本的な課題を推進する中で、以下の点に一層重点を置いた事業を推進してきた。

(1) 2011年3月11日の東日本大震災の教訓を踏まえ、貴重資料に関する書誌的資料研究をより一層強化し、併せて貴重資料の修復・保管・複製化・電子化という連続した資料保存とその公開をより系統的かつ持続的に推進する。

(2) 大きく変動するアジア＝世界情勢に対応する研究として、東洋文庫のすべての研究班の連携によって構成される「総合アジア圏域研究班」を設置し、主題研究、地域研究、資料研究を連結した「総合アジア圏域研究」を全アジア的視野から推進する研究体制を構築する。

(3) 「総合アジア圏域研究」に伴う資料交流・人的交流・国際交流を一層推進し、研究成果を電子化などにより広く発信し、国際交流ならびに国際的な発信力を強化する。

(4) 東洋文庫における資料研究・総合アジア圏域研究・国際交流・国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材を育成する。

これらの基本的な事業を継続的に推進するために、2015-17年度においては図書資料の書誌入力ならびにデータベース化をさらに進めると共に、各研究班によるアジア現地研究・資料調査と収集を行い、研究成果を東洋文庫の刊行物ならびに各種講演・講習会ならびにミュージアムによる経常的な公開展示を通して、ひろく内外に成果を発信する。これらを基本とし、具体的には以下の事業を継続して行う。(1) 東洋学講座、(2) アジア言語資料ならびにアジア関連洋書資料に関するコーディコロジー（資料学）講習会、(3) すべての研究班による総合アジア圏域研究国際シンポジウムを各年に開催する。(4) 研究成果のデータベース化による国際発信を強め、(5) ハーバード・エンチン研究所ならびに ECAF (European Consortium for Asian Field Study) を始め協定機関との国際連携を強める。とりわけデジタル図書館としての機能を高めるため、横断的資料検索データベース作成に取り組み、アジア各地域を地域横断的に、また歴史＝現代的に比較検討し、アジア研究の総合的研究水準を高めることを目指す。

## A. 超域アジア研究

### 超域アジア研究部門

#### (1) 総合アジア圏域研究班

##### 「総合アジア圏域研究(2)」

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野間のまた国際間の比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、欧文電子情報としてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能な特徴ある研究である。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」では、2015-17年度では、横断的かつ地域比較の方法による総合アジア国際研究シンポジウムを「アジア研究に関する基本的分析概念の検討」を基本テーマとして行う。これは、アジアの各地域に関する基本的分析概念を地域横断的にまた地域比較的に検討する。

2015年度は「イスラーム社会におけるワクフ(寄進)研究」を核とし、すべての研究班から対応する概念を抽出し、相互比較の手法により検討する。2016年度は「アジアの統治理念と統治構造」に関する基本概念を比較検討する。2017年度は「アジアの社会変化と価値」を検討し基本的概念・語彙を抽出する。

これらは、東洋文庫の資料を横断的に検索することを可能とする総合的検索データベース作成の基礎過程をなし、日本を含むアジア研究全体の現状と将来を展望することを目的としている。また、研究成果は、ワーキングペーパーやオンラインジャーナルにおいて発信する。

#### (2) 現代中国研究班

##### 「現代中国の総合的研究(3)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーバード・エンチン研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

##### [研究実施計画]

- a) 資料グループは、2011年度に刊行した和文論叢『モリソンパンフレットの世界』をもとに、引き続き東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソン・パンフレットを整理し、系統的な調査・研究を着実に進める。
- b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情に関心を持つ中堅・若い研究者をメンバーとする「総合研究－陳情」研究会を隔月一回開催する継続する。
- c) 経済グループは、南京大学に保管されていた、戦前の中国農村調査の基礎データ(ロッキング・バック資料)を修理・収集し、広く利用可能なデータとして東洋文庫に収蔵する作業を継続する。さらに「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第2部として、毛沢東時代の「社会主義経済」にかんする再検討を行うため

に、メンバーを増やして研究会を継続する。

- d) 国際関係・文化グループは、前年度に続き、全体的な研究テーマ「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」の下、2ヶ月に1回程度の研究会を開催していく。
- e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行う。

### (3) 現代イスラーム研究班

「新中東・イスラーム圏における議会主義の展開と立憲体制を軸とする政治文化に関する総合的比較研究」

国民国家システムが大きく再編を迫られる現代世界にあって、国民国家そのものの限界が叫ばれ、その克服が盛んに議論の俎上に上る世界の趨勢とは別に、ますます強固な枠組みへと移行しつつあるかに見える新中東・イスラーム圏（西アジア、北アフリカ、中央アジア）の諸国民国家において、議会主義と立憲体制が占める位置と役割は、域内諸地域・諸国により、その形態と質を大きく異にしているとはいえ、押しなべて決して小さくはなく、それぞれの政治文化を大きく規定し、特徴づける重要な要因となっている。現代イスラーム班では、新中東・イスラーム圏内の諸国を対象として、その議会主義の展開と立憲体制を巡る諸問題、そしてそこに醸成される政治文化を分析し、それらを相互に比較検討するための土台となる比較の枠組みを構築することを本来的な目標として設定する。

具体的には、世界の当該地域研究において、これまでほとんど用いられることなかった、或いは本格的かつ体系的な使用が必ずしも十分にはなされてこなかった当該地域諸国の議事録を中心とする議会文書や議会関係文書（議員など関係者の回想録や日記 etc）の整理・分析を通じてそれぞれの地域（国家）に誕生した議会主義をめぐる政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。加えて、こうした作業を進めるにあたって不可欠となる当該地域における現地語関係資料群の収集と整理、データベース化を推進し、日本における関係資料センターとしての充実に最大限の努力を傾ける。

[研究実施計画]

- a) 日常的な研究活動は、便宜的に、アラブ、トルコ、イラン、中央アジアの4グループに分かれて、それぞれ独自に研究会、公開講演会を組織しながら、進めることとする。また年度末には合同で研究会を開催し、現代イスラーム研究班として成果を共有するとともに、次年度に向けての研究活動方針の策定を行う。
- b) 扱う問題の性格上、必須の要件として、現地のカウンターパートとの共同研究の実施がある。各グループがそれぞれ担当地域（諸国）のカウンターパートとの共同研究体制の構築を積極的に行い、現地研究者との研究上の交流の緊密化を図る。例えば、イラングループでは既に東洋文庫と間で締結されているイラン・イスラーム共和国議会図書館資料センターとの研究協力協定に基づき、一定程度の研究交流を進めてきているが、今後はこれをさらに徹底させ、互いの学術成果の共有や人的交流の常態化を図る。
- c) 現地研究者との連携を重要な要件とする本プロジェクトでは、各グループがそれぞれ年に一回は現地研究者あるいは欧米の研究者を招聘し、研究会を開催することを目標とし、また、最後の年度には、合同の国際研究集会の開催を視野に入れ、その成果を、何らかの形で公開する。
- d) 適宜、開催される各グループ主催の研究会とは別に、各研究分担者、研究協力者は個別および共同で研究を実践し、その成果を個別論集（随時）あるいは研究論文集の形で世に問う。

## B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動的な展開を理解するためには、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎研究が不可欠である。本研究はアジアの現状と密接に関連する歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を行う。

### 1. 東アジア研究部門

#### (1) 前近代中国研究班

##### ①「中国古代地域史研究－『水経注』の分析から－(3)」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。具体的には、これまでの分析でも用いた旧ソ連製(1978年、1/100,000)の詳細なランドサット衛星地図および最新の地理的・考古学的情報と、楊守敬『水経注図』と重ね合わせ、近年の考古学資料とともに原典の注文・疏文までを精読し、『水経注』訳注の刊行を目標とする。

河川流域を「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究に大きな影響を与えるものである。

[研究実施計画]

- a) これまでの研究から継続して、陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとし、講読を隔週の研究会において実施する。すでに渭水篇訳注上・下巻に続き、2014年度には洛水・伊水・灤水・澗篇の訳注の出版を実行したが、これに続けて巻16の穀水以下洛陽周辺の諸水の分析にとりかかる。洛陽一帯の地域史的発展というこれまでの視点に、近年特に盛んとなっている洛陽都城史研究の成果を加えて、一層深みのある地域史研究を目指したい。
- b) 上記の目標を完成するため、穀水等諸水の流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集を実施する。また現地で実際に発掘に従事している中国人研究者・研究機関との学術交流や実地調査を実施し、流域の古代遺跡の実態を把握する。流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的な自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。2016年度以降に継続刊行を予定している『水経注疏訳注 穀水等篇』にも、これらの成果を反映させる。

##### ②「東アジア都城の考古学的調査・研究(4)」

本研究班では、これまで渤海を中心とした東アジアにおける都城の比較研究を行ってきた。中国における渤海都城の『上京龍泉府』、『西古城』(中京顯徳府比定地)、『東京龍原府』(八連城)などの発掘調査報告書の刊行が進められる一方で、朝鮮半島、ロシア沿海州の渤海の城跡(クラスキノ古城、コクシャロフカ古城など)の発掘調査・研究も進展を見ている。これら各地の渤海古城の報告書やそれらについての研究書が刊行され、資料の蓄積も充実してきている現状から、本研究班では、それらを整理し、綿密に検討することを目的に研究を進める方針である。また、これまでは都城や城跡の構造、機能などの研究にその中心が置かれていたが、本研究ではこれら都城、城跡に付随する墓跡、集落跡、それらの遺跡から出土する遺物についても注目していく予定である。これまで本研究班では2004年度に『東アジアの都城と渤海』、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊し

てきたが、本研究においては、渤海の墓、土器・陶器・瓦などの遺物についての研究成果を発表し、特に本研究の総括者が関係するロシア沿海州の遺物の科学的分析についても、行っていく予定である。

[研究実施計画]

- a) 2015年度は、中国、朝鮮半島、ロシア沿海州の都城・古城に関する文献の整理と内容の検討。特に上京龍泉府、西古城(中京顯徳府比定地)、八連城(東京龍原府比定地)の発掘調査報告書の検討。出土遺構、出土遺物、それらの年代などについて、報告書の内容を精査し、その妥当性について検討を加える。合わせて、ロシア沿海州の渤海古城であるクラスキノ古城のこれまでの発掘調査報告書を整理してまとめる作業を行う。この作業において必要と思われる海外資料調査も行う。
- b) 2016年度は、上記都城、古城に加え、朝鮮半島の渤海古城の調査成果から、城跡以外の遺跡(墓跡、集落跡など)についての検討を行う。また、それらの遺跡から出土した遺構、遺物についての検討を行い、渤海の中心地である都城との比較検討を行う。遺物については、科学的分析(C14年代測定、植物遺存体の分析など)を行う。この作業において必要な海外資料調査や海外からの研究者の招聘も随時行っていく。
- c) 2017年度は研究成果を公刊する。前2年間において得られた成果を報告書の形で刊行し、研究の総括を行う。

### ③「中国社会経済史用語のデータベース化」

東洋文庫で開設当初から行われてきた《歴代正史食貨志訳註》の研究成果を基礎としながら、これに関連して制作した語彙索引、用語集成などを整理し増補して、これを中国社会経済史の用語集成として編集し、データベースとして公開利用に供することを目的とする。すでに『中国社会経済史用語解』(2012)を刊行し、そのデータベースも公開(2014)したが、『宋会要輯稿食貨篇社会経済用語集成』(2007)もデータベースとして近く公開する。

[研究実施計画]

- a) 《2015年度》①梅原郁氏寄贈の『宋元明代政治・社会・経済用語資料』(【1】宋代カード16万枚、【2】元明カード11万枚)をデータベースの版下原稿に編集する。②『三台万用正宗：商旅門・律令門』『蜀訟批案』などを訳註しつつ商業用語、法制用語を採集し、増補版『用語集成』のデータベースの版下原稿をつくる。
- b) 《2016年度》2015年度研究①の【1】、【2】をホームページ上で公開する。②の研究を継続する。
- c) 《2017年度》上記②の研究成果を編集し、『中国社会経済用語解』の増補としてそのデータベースを公開する。

### ④「前近代中国民事法令の変遷(2)」

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去8年間、この方向で研究活動をしてきた。この8年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてる必要があることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析する

に適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると思う。

[研究実施計画]

我々の研究班では2014年3月に東洋文庫から『中国近世の規範と秩序』と題する論文集を刊行し、これまでの研究成果を単行本として公表することができた。今後3年間の研究計画としては、この研究成果を踏まえ、さらに引き続き前近代中国の民法法を中心とする中国法体系の特徴をそれぞれの研究員の専門領域である時代やテーマに則して明らかにする研究を進めていく。そのための活動として定期的な研究会を開くとともに、関係資料の収集活動もなお継続的に進めていきたいと考える。

(2) 近代中国研究班

「戦前・戦中期日本の華中・華南調査の研究」

近代中国研究班では、これまで、戦前・戦中期に日本の各種調査研究機関等が中国で実施した調査の報告書や資料に関する研究を行ってきた。特に近年では、調査対象地域を華北に重点を置いて、改めて「華北」とはいかなる範囲を指すのか、それを規定する要因は何か等、地域概念が曖昧なまま、議論がなされてきたことを指摘してきた。そこで2015年度から2017年度にいたる研究期間においては、「華北」研究の延長として、「華中」「華南」に関する調査研究を取り上げ、その内容を政治・経済・文化等様々な角度から分析し、改めて「華中」「華南」の地域概念から、戦前・戦中期の日本人の中国認識を明らかにするものである。なお本作業によって、先に取り上げた「華北」概念の再検討が可能となり、新たに近代中国の全体像を再構築することができるかと確信している。

[研究実施計画]

- a) 前期の研究期間において検討地域とした「華北」については、2013年12月に『華北の発見』と題する報告書を出版した。本研究期間でもこれまでの研究方法を継続して、地域研究として発表された「華中」「華南」に関する諸研究に関する研究史整理を踏まえて、膨大な数に上る戦前・戦中期の日本による調査報告類を整理分類する。特に本研究期間の研究メンバーに、「華中」や「華南」を専門的に研究対象としてきた研究者を新たに加えたことにより、より一層深みのある地域史研究を目指すこともできる。
- b) 上記の目標を完成するため、南京大学や中山大学等、現地で戦前・戦中期の日本側史料を活用している中国人研究者・研究機関との学術交流や実地調査を実施し、「華中」「華南」地域の実態を先端的研究内容を踏まえて把握する
- c) また「華南」等については、台湾総督府の調査等も大きく関与していると思われるので、台湾の中央研究院や国史館等の研究機関や研究者等とも学術交流や実地調査を実施し、中国各地の地域社会の構造の変化に留意しながら、20世紀の日本人が持った中国認識の実像を明らかにする。
- d) 『近代中国研究彙報』第38号を刊行する。

(3) 東北アジア研究班

① 「近世朝鮮記録類の総合的研究」

当班では近世朝鮮史研究の基盤形成作業の一環として、これまで戸籍関係資料と帳簿類をはじめとする冊子体の各種公私記録類(しばしば成冊などとよばれた)を対象に、日本国内の大学やその他の研究機関・個人等が所蔵するものについて書誌的ないし歴史学的な視点から調査・研究を継続して進めてきた。このうち



とくに後者については、従来全体的な調査がなされたことはなく、そのため日本国内にどのような内容の記録類がどの程度存在するのかさえほとんど未解明であったが、当班によるこれまでの調査によってその全貌がほぼ明らかになりつつある。

本課題は、こうしたこれまでの調査・研究活動の延長線上に位置づけられるものである。戸籍関係資料や冊子体の記録類以外にも、日本国内には近世朝鮮で作成された各種の記録類が存在する。たとえば古文書類や、写本の形で伝わる日記・紀行文・回想録などをあげることができる。しかしこれらについてもこれまで網羅的な調査は行われていない。そこで本課題では、そうした各種記録類の現存状況を確認し、個々の資料の基本的な情報を収集・整理すること、そしてそれらを体系化して解題目録にまとめることをめざす。さらには、そうした作業を踏まえつつ、それらの記録類の史料的性格、あるいはそれらの記録類に基づいた近世朝鮮社会の分析にも歩を進めたい。

#### [研究実施計画]

- a) これまでの調査で得られた冊子体の各種文献記録類の書誌情報を総合し、さらに必要に応じて東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等いくつかの機関において補充調査を実施して新たな情報を収集・整理することで、さきに刊行した『日本所在近世朝鮮記録類解題』(2009年)の増補改訂版を編集・刊行する。それによって当該記録類の解題目録の決定版を完成することをめざす。
- b) 日本所在の近世朝鮮古文書についてその悉皆調査をおこなう。日本所在の近世朝鮮古文書は、その一部についてはすでに学界に紹介され、解題も作られているが、その全貌が明らかにされたとはいいがたい。京都大学附属図書館河合文庫(土地売買文書類・貢人関係文書類ほか)をはじめ古文書資料の存在が確認されている諸機関や、それ以外にも可能性のある機関で調査を実施する。それらの成果を段階的に整理して解題目録を作成する。
- c) 写本の形態で伝存する日記類や紀行文・回想録などについても同様の調査をおこなう。
- b) これらの調査の進行状況をみながら、各班員がそれぞれ個々の資料について立ち入った分析や研究を進める。

#### ②「満族関係資料の研究」

本研究メンバーは、いままで清朝満洲語檔案資料に関して研究を実施し、「満文老檔」「旧満洲檔(「満文原檔」)」「鑲紅旗檔」「内国史院檔」等の訳注・出版をはじめとして、世界の満洲語檔案研究をリードする研究成果を公表してきた。今後もその研究を継続したい。また併せて本研究グループ構成員が、1980年代より現在にいたるまで、中国各地、とくに中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、そしてロシア極東等で調査を行った際に撮影した画像・映像類、当地で収集した資料(パンフレット、地図を含む)類に対する学術的・体系的な整理・研究を実施したい。したがって、本研究では次の二点をおもな課題とし、研究をすすめる。

第一に、清朝満洲語檔案資料、とくに公益財団法人東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗檔」(鑲紅旗満洲都統衙門檔案)に関する研究である。清朝を基底組織たる八旗、とくに「八旗満洲」の存在は、その国家構造を考える際きわめて重要であることは言を俟たない。「鑲紅旗檔」は、雍正元年の衙門創立から清末まで約300年にわたる公文書群で、一八旗都統衙門の文書がこれほどまとまって保存されているのはほかに例をみない。本研究グループは、この文書に対してすでに数多くの研究成果を公にしているが、それらの成果を総括する「研究篇」(英文)の作成をめざし、グループで研究を続けている。本研究はまずこの研究を継続して実施し

たい。

第二に、いままでグループ構成員が実施した、中国東北部をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究である。近年の中国経済発展はめざましいものがあるが、その一方で開発にともなう環境の変化が社会問題ともなっている。文化財および歴史的景観についてもそれは例外でなく、観光開発と称する遺跡破壊や現状変更は、中国いたるところで起こっている。その変化は2000年を超えてからより顕著となっており、いまでは回復不可能なものも数多く存在する。本研究グループ構成員は、1980年より現在にいたるまで、ほぼ毎年中国東北部の満族関係遺跡・文化財を中心として調査を実施してきたが、それらの調査によるデータ・資料が相当数蓄積されている。これらの資料は、いうまでもなく、現在の中国ではほとんどみることのできない貴重なものである。本研究では、一の「鑲紅旗檔」研究に加え、本研究グループ構成員が中国各地で集積した満族(清朝)関係の画像・映像データ、そしてパンフレット、地図等の資料を、体系的に整理・研究をしようとするものである。

[研究実施計画]

- a) 東洋文庫所蔵「鑲紅旗檔」に関する共同研究の実施。
- b) 1980年代より中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、そしてロシア極東等の地で調査を実施した際に撮影・収集した主として満族(清朝)関係資料について整理・研究する。これらの資料については、デジタル化を進めるとともに、データベース化と目録化を進め、公表にむけて準備を行いたい。

### ③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析：政治・社会・経済・民族・文化の展開」

中国では内外政治・経済・民族を中心とする国家事業を急進させるなか、長期間に互って内在していた政治・経済・民族・文化の問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。清朝は所謂「北京京師体制」を拡充させることで清代諸領域における歴史的構造としての特徴を確立し、政治・経済・民族・文化の問題としてさまざまな展開をみせてきた。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題もまた現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。本研究班におけるこれまでの成果を基盤にして、刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と政治・社会・経済・民族・文化の展開における諸関係を分析する上で特に不可欠となる官撰文献ならびに檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、読解、デジタル化し、向後の研究に広く貢献していきたい。

[研究実施計画]

- a) 2016年度に【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』1/清朝初期政治史研究(1)】、2017年度に【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』2/清朝祭祀儀礼研究(1)『壇廟祭祀節次』】という出版計画で準備する。
- b) 写真で蒐集した史料の一部を既に公開したことに続き、清代政治・経済・民族・文化の各専門研究領域をもとに、海外における図書館・檔案館・研究機関等に所蔵されている檔案文献史料類マイクロ=フィルム方式や新たなデジタル化方

式による整理・分析作業を進める。

- c) 上記の新規蒐集史料と密接な東洋文庫収蔵の文献資料類を新たに検討し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開する計画の一環として、東洋文庫所蔵の祭祀儀礼資料類を総合分析することによって、従来みられた清朝の国家支配構造をめぐる研究アプローチとは全く異なる、デジタル手法の導入による資料検証ならびに清朝宮廷儀礼の復元作業を、新たな長期研究課題として設定する。

#### (4) 日本研究班

##### 「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(3)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006年度までに、室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(I～V)を公刊したが、その後も、近世期の成立、ないしは刊行の貴重書について調査を行い、その書誌解題を広く公開してきている。2009年度刊行の『岩崎文庫貴重書書誌解題VI』と、2012年度刊行の『同VII』において歌書を中心とした解題を公刊した。今後さらに草子類についての調査と解題刊行を継続して、岩崎文庫所蔵の貴重書の研究基盤を整備し、その資料的価値を周知して行きたい。

##### [研究実施計画]

- a) 上記の『岩崎文庫貴重書書誌解題』のI～VIIに引き続き、2015年度には、岩崎文庫の内から、江戸期成立・刊行の絵入り本(奈良絵本・仮名草子丹緑本ほか)47点について、書誌調査を行い、分担して書誌解題を執筆し、研究会を催して検討の上で第VIII輯として公刊する予定である。なお、とくに奈良絵本については、本文の翻字を合わせて公刊する予定である。
- b) さらに『岩崎文庫貴重書書誌解題』の第IX輯として、絵入りでない草子類の書誌解題につき、企画検討・調査・書誌解題執筆を行う。第IX輯は2018年度の公刊をめざす。

## 2. 内陸アジア研究部門

### (1) 中央アジア研究班

#### ①「古ウイグル語および関連諸語古文献に関する研究」

本研究は、サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー(RAS)東洋写本研究部(IOM)に蔵されているセリンディア・コレクション(SIC)の中で、東洋文庫にマイクロフィルムとしてもたらされた古ウイグル語を中心とする古文献について、2014年度までに作成した仮目録(カタログ)第2版を基礎としながら、次のような目的を果たそうとするものである。

古ウイグル文献と、それに関連する中央アジア地域の諸言語によって書き残された古文献は、世界各地の所蔵機関や国際的な連携組織(例えば国際敦煌プロジェクト=IDP)などの努力により、次第にその全容が把握できるようになり、同時に、個別の文書研究の蓄積も増大してきた。これらに基づき、(1)多くの出土古文献に関する古文書学的特徴について、従来のデータをさらに充実させる。(2)また漢文面(主に仏典)の内容をも参考にしながら、多くの断片をつなぎ合わせ、古文書群の系統研究をおこなう。(3)古文献の読解によって内容研究をすすめる、とりわけ古代・中世期の中国・インド・中央アジアにまたがる地域の言語・文化とその担い手たちの実態・交流・変容・歴史の解明に寄与する。(4)なお、古文献断片のつなぎ合わせ研究を、別の角度からみて、19～20世紀の中央アジア地域における諸国探検隊の活動の実態を解明する手がかりを探求する。

[研究実施計画]

- a) 古文書学的データを確定するために、所蔵機関において現物調査をおこなう。IDPウェブサイトに掲載されている諸機関の古文献については比較的容易にデータ収集が可能だが、サンクトペテルブルグの場合には、SICグループとの連携をはかる必要がある。
- b) 仮目録第2版の校訂を不断に行い、5,600点ほどの断片類の詳細を明らかにする。その際にも、サンクトペテルブルグのSICグループと緊密な連携をはかり、最終的にはファクシミリ付きの包括的なカタログの作成・公開を目標とする。すなわち、カタログをデータベースとしてウェブ上に公開することを目指す。SICグループとの関連によっては最低限でもなんらかのメディアの形で研究者に公開することとする。
- c) 古文献の内容に関する個別研究、比較研究を、サンクトペテルブルグ所蔵のものに限定せずに、メンバーが個別および共同で広く行い、成果を個別論文(随時)および論文集(2017年度予定)の形で公刊する。このプロセスの中で、適宜、共同研究会を開催する。
- d) 出土古文献に関する諸情報を共有するために、必要に応じて内外の研究者の講演会を開催する。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族」

ソ連解体(1991年)以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や現地調査も可能になったことは決定的な意味をもっている。こうした研究環境の変化をうけて、本研究は次の二点をおもな課題とする。

第一に、中央ユーラシア地域は、19世紀後半からロシア帝国や清朝の統治下で近代を迎え、その過程でイスラームの改革を志向する潮流と既存のイスラームを固守する潮流との緊張関係が高まり、ほぼときを同じくして民族的な覚醒が進行した。こうした動きは同時代の新聞や雑誌などの定期刊行物やロシア当局のアルヒーフなどから分析することができるが、イスラーム改革と民族的な覚醒との相互関係は十分に解明されているとは言えない。この問題は後のソ連時代および現代の動向、とりわけイスラーム復興と新しいナショナリズムとの相関を考える上でも重要であり、本研究はまずこれに注目したい。

第二に、近現代中央ユーラシアにおけるイスラーム改革と民族的な覚醒は、いずれも帝国の体制や秩序とムスリム社会との相互関係あるいは緊張関係を背景として生まれたものであり、また同時代のオスマン帝国やイラン、インドなどのイスラーム地域における政治社会運動の影響も無視するわけにはいかない。さらに、その後の社会主義体制がもたらしたイデオロギーや社会変容の影響は、それ以上に重要である。ソ連解体後においては民族の別を越えたグローバルなイスラーム復興の潮流が浸透する一方で、新独立国家のナショナリズムと結びついたイスラームがこれに対抗するような構図も生まれている。本研究では、このような多様な要因に留意しつつ、イスラームと民族の相互関係について総合的な理解をめざしたい。

[研究実施計画]

- a) 中央アジア諸国やロシア連邦において史料収集をおこなう。おもな調査地として想定しているのは、タシュケント(ウズベキスタン)、カザン、サンクトペテルブルクなどの文書館・図書館や研究機関である。
- b) 近現代中央ユーラシアで刊行されたロシア語を含む中央ユーラシア諸語による定期刊行物は、これまでの収集活動によって東洋文庫にも少なからず所蔵され

ており、これを積極的に活用して研究を進める。同時に新たな定期刊行物資料の収集とデジタル化を進めたい。

- c) 東洋文庫を拠点に内外の研究者の参集を得て中央ユーラシア研究会を開催し、最新の研究成果を共有しながら研究を推進する。

### ③「敦煌・吐魯番資料に見る多元的宗教社会の研究」

当研究班は「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」計画にもとづき、漢語文献の整理把握に努めてきた。その結果、非仏典漢語文献の集約はほぼ完了し、現在計画中の「敦煌吐魯番論集」に成果を報告することで一区切りをつける段階を迎えた。これをふまえ本研究では、改めて敦煌吐魯番文書資料研究の原点に立ち戻り、また近年新たに発見、整理された資料も積極的に取り込みながら、その時代と社会の特質や構造の解明に取り組むことを計画している。

敦煌文書や吐魯番文書の時代は仏教が社会に浸透し、人々の日常生活や風俗、社会の規範などを規定したことが知られている。文書中には膨大な仏典が残され、地域には信仰の対象となる石窟や寺院が確認される。またマニ教やゾロアスター教や道教などの存在も見逃すことはできない。本研究はそうした多様な宗教が息づいた時代性を意識しつつ、その時代が生み出した諸資料を柔軟に取り上げるが、そのことは同時に、欧米や中国で高まる同時代研究の動向にも対応するものである。

なお当研究班は、長年にわたり戸籍や契約文書などの非仏教社会経済文献研究で実績をあげてきており、今後もこれを重要な柱とすることは変わらない。その上で、宗教や文化の領域とも接点を持ち、また中堅若手研究者も加えて、研究のすそ野を広げていく。

#### [研究実施計画]

- a) 近年、敦煌・吐魯番文書を中心とする内陸アジア漢語文献が、『新獲吐魯番出土文献』(中華書局、2008年)、『新疆博物館新獲文書研究』(中華書局、2014年)などの報告書や論文で紹介が相継ぐ。それらの報告や研究の集約と整理を進め、文献目録および文書資料集を整理し作成する。また新出資料の公表や新情報の入手された場合には、すみやかに共同で議論する場所を用意し認識を深める。それら新出資料や成果には、石窟や石刻資料も対象に含める。
- b) 国内では、杏雨書屋蔵『敦煌秘笈』全10冊や寧楽美術館蔵『吐魯番文書』などを始めとして、諸機関に所蔵される文書について、仏経関係文書も含めて系統的に把握に努め、可能であれば現地調査をする。また整理と並行して資料の読解、翻訳を試みる。
- c) 前計画で進めたサンクトペテルブルク所蔵の漢文文献の整理に関わって、なお部分的に残された資料整理とその公表に協力する。
- d) 上記諸項目は共同研究の形をとって進め、若手研究者にも研究メンバーとして積極的に加わってもらい、当該領域の幅を広げることに努める。研究班はこれまで続けてきた「漢語文書輪読会」を定常化させ、また定期的に開催した「内陸アジア出土古文献研究会」の一層の活発化をはかる。その上で、年に1度シンポジウムを開催し、蓄積された成果を外部に提示する。
- e) 3年の研究期間の最終年度には、可能であれば本研究テーマに基づく国際シンポジウムを開催し、その成果を一書にまとめることを考える。以上の諸計画を実現するために、東洋文庫を一つの基盤とする大型科研の獲得に努力する。

## (2) チベット研究班

### 「チベット語文献資料の基礎研究」

(1)新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかる。(2)とくに河口慧海請来文献の電子テキスト・データベースを作成し、公開する。(3)敦煌チベット語文献、河口慧海請来文献、新たに収集した文献を含む東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献の写本校訂と訳注研究を行い、成果を刊行する。(4)以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指す。

#### [研究実施計画]

- a) 資料収集: 近年中国・インドなどで新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版を収集する。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかる。
- b) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行う。
  1. 筆記体写本の校訂: 河口慧海請来文献の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキスト・データベースを作成する。
  2. 1のデータベースをもとに文献の分析・研究を行い、写本研究シリーズを刊行する。
  3. 『西藏仏教宗義研究』シリーズの続刊として、トゥカン『一切宗義』中国の宗教の章を刊行する。
  4. 中央アジア出土チベット語文献の研究を行い、武内紹人研究員を中心に中央アジア出土文献研究シリーズを刊行する。
  5. チベットの文学について、星研究員を中心に研究成果をとりまとめる。

## 3. インド・東南アジア研究部門

### (1) インド研究班

#### 「インド刻文史料の蒐集と研究(2)」

インド(南アジア)の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究における根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

#### [研究実施計画]

- a) 東洋文庫に所蔵のない刻文史料について、インド独立後の新しい出版物(とくに、情報の少ない州政府考古学局の)を現地で調査し、収集する。インド政府考古学局が収集しながら未出版の刻文は、その許可を得て、マイソールの刻文部でトランスクリプトをコピーする。
- b) 研究班メンバーおよびインドの研究協力者が共同し、刻文によって知りうる古代・

中世の国家構造と社会統合を、インドにおける南北文化の歴史的相違と関連させて考察する。インド他の研究者を招いてセミナーを行い、国際的な研究の進展を図る。

- c) *Report on Indian Epigraphical Studies: The Toyo Bunko* および 2013 年度に東南アジア研究班と共同で行なった国際シンポジウム *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia* の英文報告書の出版を行う。

## (2) 東南アジア研究班

### 「近現代東南アジア史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第2次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目されてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な史料となりうる。本研究は、日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の観点からその記述を検討し、日本人を始め中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した20世紀前半期の東南アジア都市の特質について研究する。合わせて前近代や現代の東南アジアの都市との比較研究を行い、社会統合や広域ネットワーク形成に果たすその歴史的役割を検討したい。

### 〔研究実施計画〕

- a) 研究班のメンバーや関係研究者による研究会を開催し、近現代ならびに前近代の東南アジアの都市の成り立ちや構築したネットワークの特質、社会統合に果たす役割について検討する。20世紀前半の植民地期の東南アジアの都市は、のちの新生国家の国民統合の基盤を形成しただけでなく、その後の外来系住民と現地人との確執関係をはじめ、エスニシティ問題や領域帰属などを生み出す背景も醸成したと考えられる。とりわけそれまでコスモポリスを形成していた東南アジア諸都市のハイブリッドな空間が、植民地期においてどのように維持されたか、あるいは変容したかを考察することは重要な課題となる。そのための必要な史料収集や訪問調査を行い、これらの成果をまとめて最終年度に出版する。
- b) 明治期から1960年代までの日本の東南アジア関係の文献を収集整理し、そのデータベース化を進める。合わせてそれらの文献の特質について検討し、近年40年間の日本の東南アジア研究と比較する。また東洋文庫が所蔵している故仲田浩三氏の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料は、前近代の都市の役割を検討するための重要な資料であり、その目録刊行を行う。

## 4. 西アジア研究部門

### 西アジア研究班

#### 「イスラーム地域の比較制度研究」

イスラーム地域の文書史料(土地台帳・財務帳簿・勅令などの行政文書、イスラーム法廷文書、ワクフ文書、契約文書など)、叙述史料(年代記、地誌、伝記集など)、

法令・法学書をもとに、社会制度や規範の地域間(アラブ、イラン、トルコ、中央アジア)の比較研究をすすめ、イスラーム地域の社会システムの共通性と異質性、および歴史的变化を明らかにする。日本からの研究発信であることを重視し、中国や日本社会との比較の視点に留意し、東洋文庫の他の研究班との研究交流をすすめる。

研究活動としては、前期(イスラーム世界の契約)につづき、ワクフ研究およびヴェラム(モロッコの契約文書)研究を二つの柱とする。ワクフや契約の基盤となる法律制度、行政組織、社会関係についても広く研究をすすめる。

NIHUイスラーム地域研究東洋文庫拠点の研究活動と連携し継承し、国内の文書研究プロジェクト(京都外国語大、東京外国語大アジア・アフリカ言語文化研究所など)、および海外の研究機関(フランスCNRS、ウズベキスタン科学アカデミーなど)や研究者と連携し、国際的なネットワークを形成する。

#### [研究実施計画]

- a) ワクフ研究 ワクフ(宗教的寄進)は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。個人や家族にとって、財産保全、金融、投資、年金の役割をもち、その現代的な意義も注目されている。フランスCNRS国際共同研究(GDRI)と連携し、ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史の変容を解明する。
- b) ヴェラム文書研究 東洋文庫が所蔵するヴェラム文書(皮紙に書かれたモロッコの契約文書、16-19世紀)の研究を継続する。2014年度には、8点の当該文書(1989年購入)のアラビア語テキスト校訂と解題・研究(英文、仏文)を刊行した。当該文書の校訂・研究は世界で初めての開拓的な出版であり、売買や相続などの契約、書式や公証人や裁判官の役割、文書の伝世などを明らかにする。2014年度にあらたに皮紙11点、木片29点の類似文書を購入し、東洋文庫は希有なコレクションを保持する機関となった。当該の文書の解読・研究を海外研究者(モロッコ、オランダ)と連携して進め、2018年度に研究成果を出版する。
- c) 2016年度に『イマーム・レザー廟ワクフ文書集(ペルシア語文書テキスト校訂、解説研究=英文)』、2018年度に『ヴェラム文書研究(モロッコの皮紙契約文書の研究)PartII(アラビア語文書テキスト校訂、解説研究=英文)』を刊行する。

## C. 資料研究

### 資料研究部門

#### 東アジア資料研究班

##### 「東アジア資料の研究(2)」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

#### [研究実施計画]

- a) 中国、台湾、香港、東南アジア、などに所蔵される文献資料、現地調査資料の探索、図書館、資料館との間に国際的情報交換、資料交換、人的交流を促進する。
- b) 上記の結果、得られた文献・画像資料をデータベース化して公開する。
- c) 中国、韓国の現地調査で得られた現地資料に基づき、『東アジア比較演劇史』を主題とする報告書を刊行する。



#### D. 各種研究会・講演会開催

各研究班、グループにおいて、東洋文庫内外の研究者参加による研究会・講演会を開催する。

## II. 資料収集・整理

超域研究、歴史・文化研究を実施するとともに、アジアの現状および歴史に関する一次資料(写本、古文書、古文献、地図、統計、調査記録など)、専門研究書、定期刊行物を収集し、世界に誇る東洋文庫の既収資料をさらに増補・拡充する。収集した資料は、速やかに整理して電子情報化し、アジア学資料センターとしての機能強化を推進する。

上記の計画にもとづいて収集した資料は、分類・整理を経て、書誌情報のデータベース化と全文テキストおよび画像情報のデジタル化を推進し、オンライン検索サービスにより内外の研究者に広く公開する。

また東洋文庫の所蔵資料のうち、欧文の古文献、貴重漢籍や国書(日本関係書籍)、絵画・考古資料等については、重点的かつ系統的に修復・複製化を進め、永久保存をはかるとともに、それをデジタル・アーカイブに加工し、広範な利用の目的にもかなうようにする。

以上の活動を推進するため、書誌学的にも通曉した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、引き続き、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組む。

#### A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中に購入を進める。

#### B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進める。

#### C. 図書・資料データ入力

新収資料の書誌入力および、所蔵資料の遡及入力作業を継続する。

#### D. 資料保存整理

職員による補修再製本作業を定期的に行う。また、外部業者によるfg撮影・焼付作業を行う。

### Ⅲ. 研究資料出版

総合アジア圏域研究との連携の下に、超域アジア研究と歴史・文化研究に関する一次資料の解析と研究の成果は、継続してきた和文および欧文の紀要・雑誌・叢書として刊行され、順次オンライン公開を進める。さらに今回、総合アジア圏域研究に伴う成果を新たにアジア研究に関する欧文の電子ジャーナルとして編集発行する。これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなる。

#### A. 定期出版物刊行

- |  |           |                       |
|--|-----------|-----------------------|
| 1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)  | 第97巻第1-4号 | A5判 4冊(編集・刊行)         |
| 2. 『東洋文庫欧文紀要』<br>( <i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i> ) | No.73     | B5判 1冊(編集・刊行)         |
| 3. 『近代中国研究彙報』  | 38号       | A5判 1冊(編集・刊行)         |
| 4. 『東洋文庫書報』  | 第47号      | A5判 1冊(編集・刊行)         |
| 5. <i>Modern Asian Studies Review</i><br>／新たなアジア研究に向けて                           | Vol.6     | オンラインジャーナル<br>(編集・刊行) |
| 6. <i>Asian Research Trends New Series</i>                                       | No.10     | A5判 1冊(編集・刊行)         |

#### B. 論叢等出版

- |   |               |
|---|---------------|
| 1. <i>Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia, vol.2</i>                         | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 2. 『モリソンパンフレットの世界Ⅱ』東洋文庫論叢79   | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 3. 『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ』   | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 4. <i>Report on Indian Epigraphical Studies: The Toyo Bunko</i>                         | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 5. <i>State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia</i> | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 6. 『汪精衛文書目録』  | B5判 1冊(編集・刊行) |
| 7. 『内陸アジア出土漢語文献の様式 [特性]』  | A5判 1冊(編集・刊行) |

## IV. 普及活動

研究資料の収集・情報公開および研究促進のために、国際交流の進展に努める。また、超域アジア研究と歴史・文化研究の成果を、春秋の講演会・展示会等によって一般公開するとともに、招聘研究者および来日中の著名な外国人研究者による公開講演会を開催する。

### A. 研究情報普及

#### 1. 東洋学講座

春秋2期、年6回を実施する。

#### 2. 東洋文庫公開講座

東洋文庫の所蔵資料について、当該分野の著名研究者を国内外より招き、年3回程度実施する。

#### 3. 特別講演会

主として来日中の著名な外国人研究者を招き、年7回程度実施する。

#### 4. 談話会(東洋文庫研究会)

専門分野の若手研究者による成果報告を年2回程度実施する。

#### 5. 参考情報提供

『東洋文庫年報』2014年度版

A5判 1冊(編集・刊行)

### B. データベース公開

2015年度は、引き続き洋装本漢籍などの書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図などの画像データのデジタル化を進め、本格的な東洋学多言語貴重資料のマルチメディア電子図書館の構築をめざす。

### C. 海外交流

フランス極東学院および中華民国中央研究院、ハーバード・エンチン研究所、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、SOASとの学術交流を進め、資料・情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施する。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材育成を共同で行う取り組みを開始しており、それらを一層推進する。

## V. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

### A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

広く一般に開放された無料の閲覧室の運営。

### B. 研究資料複写サービス

1. マイクロフィルム・紙焼写真
2. 電子複写

### C. 情報提供サービス

広く参考となる発行物等を随時提供する。

### D. 展示

広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営する。

#### 1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を行う。

#### 2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことを心がける。

#### 3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期す。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営する。

#### 4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる。

- a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から毎月初めに展示資料の入れ替えを行う。
- b) 企画展は一年に3回の頻度で行う。2015年度は以下の企画展を予定している。
  - ①「地図展」(2015年4月～7月)
  - ②「教科書で見たゾ II」(2015年8月～12月)
  - ③「医学書展」(2016年1月～3月)

## E. 普及広報

1. 東洋文庫の持つ、図書・研究・普及の活動を総合し、広く一般多数の方を対象とした生涯学習講座「東洋文庫アカデミア」を実施する。
  - ・1回あたり90分、毎週1回、3回連続の講座を最小単位とし、受講者5名以上で開講する。
  - ・講座内容は、東洋に関する歴史、文学、美術、音楽、宗教、政治、経済、文化、社会、語学、図書館学、博物学などの広い分野を対象とする。
  - ・講師は、研究部長が、提出された講座提案書を検討し、採用の可否を決定する。
2. 東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保する。

## F. 国際交流

東洋文庫は、フランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン図書館、ハーバード・エンチン財団、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、SOASと協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進する。

## G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

### 1. 長期受入

#### (1) 外来研究員の受入

タヴァン・ディディエ（フランス国立極東学院 東京支部長）

「中世における臨済宗」 (2015年1月1日～2015年12月31日)

呉 真（中国人民大学副教授）

「中国古代戯曲演劇史」 (2015年1月24日～2015年2月28日)

#### (2) 2015年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

五味知子（慶應義塾大学大学院PD）

「17～19世紀中国基層社会における規範とジェンダー」

(2013年度採用、同14・15年度・3カ年間)

[受入指導者: 岸本美緒]

阿部由美子（東京大学大学院PD）

「旗人から満洲族へ—20世紀中国理解への新たな視座」

(2014年度採用、同15・16年度・3カ年間)

[受入指導者: 松重充浩]

河野 正（東京大学大学院PD）

「1950～1960年代、多地域比較による華北農村社会の変容に関する研究」

(2014年度採用、同15・16年度・3カ年間)

[受入指導者: 内山雅生]

西村 陽子(中央大学大学院PD・東洋文庫研究員)  
「地図史料批判によるシルクロード探検隊資料の統合と遺跡データベースの作成」  
(2014年度採用、同15・16年度・3カ年間)  
[受入指導者: 斯波義信]

関 智英(東京大学大学院PD)  
「戦時期中国人対日協力者(和平陣営)の戦後の活動と思想」  
(2015年度採用予定、同16・17年度・3カ年間)  
[受入指導者: 久保 亨]

吉井 文美(東京大学大学院PD)  
「日中戦争期華中の列国権益再編をめぐる国際関係の変容」  
(2015年度採用予定、同16・17年度・3カ年間)  
[受入指導者: 久保 亨]

(3) 2015年度日本学術振興会特別研究員RPDの受入  
濱本 真実(京都大学大学院PD・東洋文庫研究員)  
「近代ユーラシア陸上貿易におけるタタール商人の活動とその文化的影響」  
(2014年度採用、同15・16年度・3カ年間)  
[受入指導者: 小松久男]

## 2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行う。

## VI. 地域研究プログラム

### A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進と史資料学の開拓」

国内主要図書館における現地語史資料の所蔵と整理の状況、インターネットを含む検索・利用環境、そして研究の動向などを総合的に踏まえた上で、現地語史資料の体系的収集を継続し、共同利用を促進する。調査やアラビア文字資料司書連絡会等で得た情報や要望に基づき、現地語史資料の整理・書誌データ作成のための資料や補助ツールの作成と公開、「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の編集をはじめとする関連データベースの拡充、国内・海外の現地語史資料の概要が把握でき、検索が容易になるような情報を収集し、逐次ウェブサイトなどを通じて発信を行う。また、史料研究について、原典講読会および国内研究機関との連携による研究活動を実施し、研究情報の共有と若手研究者の育成をはかる。これらによって、史料および研究文献の収集と整理(情報化)と利用の3つの局面を連結したサイクルを築き、国際的な共同利用にむけた環境改善をはかる。

[研究実施計画]

#### a) 現地語史資料の体系的収集

アラビア語・ペルシア語・オスマントルコ語を中心とした現地語史資料の体系的収集を進める。

#### b) 文献情報の整理と利用の促進

研究会・調査活動の成果を踏まえ、イスラーム地域の現地語史資料の研究・収集・整理に有効な情報やツールをウェブサイト公開し、他の研究機関との共同利用を促進する。中東や欧米で進展している写本・文書のデジタル化について情報を整理・アップデートし、デジタル資料も含めた世界各地の史資料へのアクセスのハブとなるよう、ホームページの充実を図る。

①イスラーム地域研究資料室ホームページに、蔵書検索システムのほか、文献情報学や史料学に関する情報(新着雑誌コンテンツ、現地語史資料解題、現地の図書館・文書館の利用案内、各国のデジタルライブラリのリンク集など)を掲載し、関連サイトとのネットワークをつくる。引き続き、学生のための情報検索リテラシーセミナー(第5回)を開催するとともに、学生が史資料を効率的に検索し、活用するための手引きを作成公開する。

②現地語史資料を所蔵する関係機関の連絡組織であるアラビア文字資料司書連絡会を運営し、現地語史資料の収集・整理・利用について情報交換を行う。アラビア文字図書資料の整理や書誌作成に役立つ資料や補助ツール、ならびにマニュアル(「アラビア文字資料の目録作成の手引き」)を作成・公開し、目録情報とツールの共同利用を促進する。また、関係機関における史資料の効率的な収集や利用を促進するために、国内におけるアラビア文字雑誌・新聞などの所蔵状況の調査を行う。

③日本中東学会及び関係機関の協力による「日本における中東・イスラーム研究文献データベース(1868～2010)」の統合、国際版の公開をふまえ、引き続き日本中東学会と連携し、補遺データの作成と公開を継続するとともに、当該データベースの利用促進の広報活動を行う。また、2014年にNIHU連携研究により公開した「オスマン民法典関係文献データベース」は、新たに公刊される資料等のデータを追加して更新を行う。

④上智大学拠点との連携研究「東南アジアのキターブ目録勉強会」は、東南アジア諸地域にて収集したアラビア文字資料の整理・管理・利用の三面において、第1期に刊行した予備目録の成果も踏まえ、環境改良を推進する

#### c) 史料研究活動

①「オスマン帝国史料の総合的研究」(責任者・秋葉淳)は、オスマン帝国の国家と社会のあり方を多角的に検討するために、オスマン帝国史料の国際的な共同利用・研究にむけた方法を開発することを目的とし、活動を継続する。基本史料(アフメト・ジェヴデト・パシャ『覚書』の一部など)の翻訳・出版にむけた作業を進めるほか、オスマン帝国史の各種の史資料を検討する研究会(オスマン史研究会)を年数回開催することにより、研究情報の蓄積と共有をはかる。また、ホームページ上の研究ツールとして、「イスラーム地域資料館・研究機関ガイド」ならびに「オスマン帝国史料解題」の拡充を行う。

②「シャリーアと近代」(責任者・大河原知樹)はオスマン民法典(メジェッレ)アラビア語版の翻訳・訳注の出版を目的とし、定期的に読書会を開催する。今年度は、「第3篇 保証」および「第4篇 債権譲渡」の訳文作成・検討を行う。「法律用語集」(ハンドブック)の編纂については、継続して行う。成果公開の一部として『第1篇 売買』『第2篇 賃約』の年度内刊行をめざす。

③中央アジア古文書研究セミナー(京都外国語大学との連携)や「オスマン文書セミナー」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と連携)などと連携して史料研究セミナーを開催し、若手研究者育成のための教育研究活動を継続的に行う。また、「近代中央ユーラシア比較法制度史研究会」(旧・中央アジアの法制度研究会)(京都外国語大学との連携)を年2回、「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」(科学研究費基盤(B)、代表者高松洋一との連携)

を年10回程度、開催する。「9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」(人間文化研究機構連携研究、国文学研究資料館)との連携を進める。

④フランス国立科学研究センター(CNRS)のワクフに関する国際共同研究(GRDI)と連携し、当該課題に関する史資料の国際的な共同利用や共同研究を進め、東京で国際ワークショップを開催する。

d) 2015年10月に合同集会を開催予定。

e) 海外派遣・調査

現地における史資料調査・収集及び関係者とのインタビュー、また現地研究者とのネットワーク作りのために中東に1名を派遣する

## B. 現代中国研究資料室

「日本における現代中国資料の情報・研究センターの構築:資料の長期的分析による現代中国変容の解明」

東洋文庫所蔵の現代中国関係資料につき、解題、目録やデータベースの作成などの形で利用の促進を図る。また、現代中国関係資料を所蔵する国内諸機関との連携を強化し、現代中国関係資料の系統的・効率的収集のための情報交換を行う。海外における大型資料やデータベースの公開に関わる情報を収集し、必要に応じて共同購入・共同研究を行う。また事業計画4年目にあたる2015年度は、これまでの資料研究活動の成果を、論文集・資料解題などの形で公表していくことに重点をおく。

[研究実施計画]

a) 資料収集・公開ネットワーク活動

①東洋文庫所蔵の近現代中国関係資料の NACSIS-CAT 登録作業を進める。また、引き続き所蔵資料のうち著作権問題をクリアした資料(おもに日本が戦前期に作成した調査資料)のデジタル化やデータベース化を進め、「東洋文庫近代中国関係資料デジタルライブラリー」(これまでに 489 件、39,916 画像を公開)を拡充する。同デジタルライブラリーを、同種の資料を所蔵する他機関が作成したデータベースと連携する。

②東洋文庫所蔵の近現代中国に関わる写真資料をデジタル化・データベース化しヴァーチャルライブラリーとしてウェブ公開する。また、すでに構築した『巫東印画輯』などのライブラリーを再整備し利用者の便宜を図るほか、他のヴァーチャル・ライブラリーとの提携を目指す。

③東洋文庫所蔵資料のうち、現代中国研究に関わる特徴的な資料群について資料解題や目録等を作成して公表し、資料の紹介・利用促進をはかる。

④現代中国関係資料の系統的・効率的収集態勢の構築を見据えて、現代中国関係資料を所蔵・収集する国内諸機関との協議を行う。また海外の図書館や研究機関の研究者・実務担当者を招聘して講演会・ワークショップを行い、デジタル資料・データベース相互利用を見据えたネットワーク強化につき話し合う。

⑤現代中国研究に関わる学会・研究会・各大学研究室・研究者等に呼びかけて資料情報を募り、資料収集や情報公開を進める。

⑥現代中国関係資料を系統的に収集し、基礎的な研究資料の充実を図る。とくに大型のデジタル資料・データベースについては各拠点との共同で購入する。

b) 資料研究活動

大型資料やデータベースの分析を通じた近現代中国の変容についての解明を継続する。前年度までと同様、5つの研究班(①江南地域社会班、②図画像資料班、③ジェンダー資料班、④政治史資料班、⑤1950年代資料班)による資料の講読や整理・分析をひきつづき進める。また研究班のこれまでの成果を、シンポジウム開催、データベース構築、出版などの形式で積極的に公表する。

出版予定の成果として、ジェンダー資料班による英文著作の翻訳、雑誌特集号、論文集、『中国ジェンダー史研究入門』が、政治史資料班による「東アジア歴史の語り」をめぐる書籍、論文集がある。また、東洋文庫所蔵の「中華民国国民政府(汪



政権)駐日大使館文書」の目録・解題も出版する。

それぞれの研究班は他拠点・機関の研究者の協力を得るほか、大学院生等若手研究者の参加を募り、研究者養成も兼ねる。

c) 資料・データベースに関わる情報収集と公開

資料・データベースの情報や利用のあり方など情報交換と議論の場、次世代研究者養成の場として、シンポジウムやワークショップを開催する。また、国内外で開催される同種の会議へ、研究員等を派遣する。現代中国研究に関する各国文書館・図書館の情報を収集し、利用案内とともに公開する。

## 2015 度 公 益 財 団 法 人 東 洋 文 庫 特 別 事 業 計 画 書

公益財団法人 東 洋 文 庫  
理事長 榎 原 稔

2015年度公益財団法人東洋文庫特別事業計画の概要は下記の通りです。

### 事 業 内 容

#### I. 特別調査研究並びに研究成果の編集等

##### A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

###### 1. 研究成果公開促進費(データベース、学術図書)の対象事業

「東洋学多言語貴重資料のマルチメディア情報システム」

[研究代表者: 東洋文庫電算化委員会委員長 斯波義信]

(2014年度採用、5ヶ年・第2年度)

分野: 東洋学全般

本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所・図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約500,000件、冊数約1,000,000冊におよぶ大量の多言語資料を、書誌データのみならず、画像・地図などの画像資料、Video・DVDなど動画資料をふくむマルチメディア・データのレベルまで拡大してデータベース化し、これをインターネットを通じて、内外の研究者が自由に検索できるようにすることを目指している。

書誌データは1994年に入力を開始して以来、約15年を経て、680,000件に到達し、完成の目途がついてきた状態にあり、これを踏まえて、2004年度以降はデジタル撮影の手法によるマルチメディア・データの構築に重点を移した。従来、岩崎文庫・モリソン文庫・梅原考古器物などは、マイクロフィルムによる複製保存を行ってきたため、現在まで約6,000件、1,000,000コマを越える貴重書フィルム(35mm)を所蔵している。これをスキャナーにより画像をとりこみ、全頁データベースとして公開してきた。また、地図・絵画・貴重書全頁データについては、最新技術によるデジタル撮影により精度の高い画像データベースを構築してきた。さらに1970年代以来、中国の現地調査で得られた「農村の祭祀と演劇」に関するVideo資料を動画データベースとして公開する計画も一部実行してきている。また、2011年度には蔵書の中核をなす近現代中国関係資料の分類データベースを公開した。その結果、2002年度において毎月2000件であったアクセス数は、2011年12月末の段階で、当初の100倍を超える、300,000件に到達した。今後は、中国語資料以外の書誌データについても、分類データベースを公開して利用者の検索を容易にし、画像データについては、引き続きデジタル撮影を継続して、その量的拡大とメタデータの充実をはかる。また、動画については、まだ緒についたばかりであるので、一層の充実を目指す。

## 2. 基盤研究(B)の対象事業

### 「ワクフ(イスラーム寄進制度)の国際共同比較研究」

[研究代表者:三浦 徹]

(2013年度採用、5ヶ年・第3年度)

本研究は、フランス国立科学研究院(CNRS)国際共同研究「ワクフ」(2011-15年、研究代表者Randi Deguihemエクサンプロヴァンス・地中海人文科学研究所教授)と連携し、イスラーム地域(中東・中央アジア)において、ワクフ(イスラーム寄進制度)によって形成される社会経済関係を分析し、寄進財に関わる国家、集団、個人の3者の社会関係を明らかにする。CNRSの国際共同研究にはアラブ諸国を中心に10機関が連携し、(財)東洋文庫研究部を中心に、トルコ・イラン・中央アジアの研究者、さらにはヨーロッパ・中国・日本の寄進制度の研究者を組織した本研究計画を実施することによって、国際的なワクフ・寄進制度の社会機能に関する比較研究を行い、宗教と経済が結びついた社会のあり方を分析する。

## 3. 若手研究(B)の対象事業

### 「ジャウィ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」

[研究代表者:坪井祐司]

(2012年度採用、4ヶ年・第4年度)

本研究は、『カラム』を中心としたジャウィの定期刊行物の分析により、脱植民地化期の島嶼部東南アジアにおけるマレー人という民族集団の形成過程を検討する。従来のマレー民族に関する研究はマラヤ(マレーシア)の枠内で行われてきたが、シンガポールにおいてアラブ系の編集者により発行された『カラム』の分析から、国家・植民地の枠を超えたムスリムの連帯を模索する活動を検証する。そして、島嶼部東南アジアにおける脱植民地化、国家建設をめぐる動きのなかで、外来者を含めたさまざまな勢力の競合の結果としてマレー民族という枠組みが形成される動態的過程を明らかにする。

### 「宋金元代中国における石刻「文書」の歴史的展開」

[研究代表者:小林隆道]

(2014年度採用、3ヶ年・第2年度)

本研究は、石に刻まれた公文書である石刻「文書」が、10～14世紀(宋金元代)中国においてどのように展開したかを政治制度・文化・地域の各観点から考察する。原文書の姿を精巧に復元する石刻「文書」は、北宋期(特に徽宗朝12世紀初)を転換期として歴史的に形成・展開し20世紀初頭まで続いており、中国独自の社会・文化に根ざした文書形態と言える。本研究では石刻「文書」を文書上の文字が紙から石へと資料体を乗り継いだ姿と位置づけ、その資料対(モノ)自体が有する歴史情報に十分な注意を払う。フィールドワークや拓本調査を通し、当時の政治を直接的に表現した公文書を中国文化を代表する「書」を復元した形態で石に刻み、立石地で一定の機能を果たした宋金元代の石刻「文書」が、中国の政治・文化・地域の凝集物としてどのように歴史的に展開したのかを明らかにし、その成果を国際的に広く発信する。

## B. 申請中の研究計画

### 1. 科学研究費

- (1) 基盤研究(B) (※科学研究費補助金及び学術研究助成基金助成金)  
「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」 [申請者: 本庄比佐子]  
「イスラーム史における物質文化の基礎的研究」 [申請者: 真道洋子]
- (2) 基盤研究(B) (海外学術調査) (※同上)  
「中国渭河流域における西周文化および先秦文化の考古学研究」 [申請者: 飯島武次]
- (3) 基盤研究(C) (※学術研究助成基金助成金)  
「第1次世界大戦後のオスマン帝国西アジア領分割の今日的意義の研究」 [申請者: 設楽國廣]  
「宋～明代日用書の基礎的研究」 [申請者: 大澤正昭]  
「現代インドの経済発展の源流—ムガル時代のジャイナ教徒商人団の形成と発展」 [申請者: 小名康之]  
「イラク以西中東イスラーム世界における政治的紐帯の成立と拡大(11～13世紀)」 [申請者: 柳谷あゆみ]
- (4) 若手研究(B) (※学術研究助成基金助成金)  
「宋・元・明時代における江南中国の支配と変容」 [申請者: 小林晃(日本学術振興会特別研究員 PD)]

### 3. 三菱財団人文科学研究助成

- 「東洋のコディコロジー (Codicology) 構築に関する実証的研究  
—東洋文庫本を中心として—」 [申請者: 石塚晴通]  
「ムガル帝国の文書行政の確立・発展に関するペルシャ語文献の研究」 [申請者: 小名康之]

以上